

他の子の齒ぬけたるを見ていふ詞

21. おふり様の

○おふり様のまたぐら、鳩目かねらう、ねらうも道理、まめらやものく
娘の子を見てなぶりいふ詞

22. 鍛冶屋の職は

○かちやのしよく八きたないしよくて、つちうつたんびにきんぶらくや、それを見てお方のまめひこくや

23. 烏のまねを

○烏のまねをもどいたく
是は烏の鳴時、小児まねをしてかあくと云へば、小児の口のはたにももの出来るとて、云直す詞也

24. 縁の下のごもく

○ゑんの下のごもく¹⁹⁾で、きつとつまつた
是は小児どち、ものいゝあいていゝつめたる時、つまりたる方をそしり云詞也

25. 今日は何の日

○今日はなんの日、うしとらねの日、ちやつと尻をさぐる日
是は小児の足のまたより衣類のすそをとりて、帯にはせて他の小児のしりをはぐる也

26. 加賀の鏡屋の

○加賀の、鏡屋の、加右衛門殿、かみさま²⁰⁾の、かいなの、かたほうを、蚊がくうて、かいさに、かきやつたれば、かいがさ²¹⁾に、かいたつた
是はかの字の頭字とそろへて云

27. 起き起き小石

○をきくこいし、油かきてのましよ
是は小児あつまり、小石をもつて石をたゝきをこすに、とれざる時、此通りふて、石をたゝきおこす也

28. でんでんでのむし

○でんでんでのむし、てたらみのもかさも買てきしよ
是は蝸牛(でのむしといふを八、からの中を出たり入たりするゆへにいふ也)をとらへて、子共
かたつむり
あつまりて云詞也、右の通云うちには、からよりは出る也

29. なれなれ権太夫

○なれく権太郎、鳴ぎ地蔵殿、鎌借りて、首ちやんと切てやろ
是はむき八らのふしを一ツこめて切、長二、三寸二して口ニふくみてふく也、たて二わりめを一ツ付て、其中を
外のむきわらニすりく云詞也、よく鳴様ニとて云詞也

30. 芋虫かわらけ

○いもむし、かハラけ、ひやうたんこ、きりこ
在郷ニて云は、いもむし、かうろげ、考ニいもむし、かうろ
ぎ歟
是はいもむしを見付て云詞也

31. ありの道はどう行こう

○ありの道はどう行かう、行てかう行

是は地^(指)二ゆび五本^(指)二て筋を付 < 云、左右ともに組筋の付様次のごとし

【図2-1】如此いくつも < する也。下のづのごとし【図2-2】、此通りにかたのつく也

32. こっちの手は金に

○こつちの手は金になれ、あつちの身はくそになれ

是はとかけ其外^(断絶)二ても、毒虫^(指差し)にゆびさしすればゆびくさるとて、つばい^(唾)をはきて此詞を云

33. どっちの髪も

○どつちの髪も長うなれ <

是は兩人居て頭と頭とうちあてたる時、いたさ^(痛き)をこらゆる^(堪える)為二いふ也

34. 爺が髭は

○ぢい^(爺が髭)がひげは七日には^(生えて)へて、八日にけつそり

是は草の葉を下のくちびる、を^(願)とがいに^(願)はせていふ也

35. 地頭どの米つき

○地頭どの米つき、たいどの米つき

是八日^(暮)くれに蚊の多くあつまりうろつく時云ふ也

36. ころころ馬の子

○ころ^(う) < 馬の子^(コロ)、まだ目かあかぬかな、ちよぼにまゝ^(飯)いれて、ころころころや

是は馬の子を見て云。考二久敷童謡なるべし。一休物語二蜷川へ此詞有り

37. いれいれごんぼ

○いれ < ごむぼの図【図3】

如此に何人二ても手二手を取組^(背)て、いつれなりとも、其中のせい^(脇)の高き子のわきの下へ、手^(組み)をくミなからく^(潜る)づる。

くづると皆うしろむき^(組み)ニ手をくみ輪^(戻る)ニなる也。又もとの通^(潜り)二返りもとる也。右くづり申内二云詞

いれ < こんぼ <

又もとの通^(戻る)もとる時云詞

かへせ < こんぼ <

38. いれいれごんぼ (二人)

○又唯二人居申時は【図4】

此とほりに^(通り)にして、くるくまわり^(廻り)申也。

此時の詞

扇子^(たたんで)たゝんて腰にさいてしんじよ、元結^(もつとい)ひねつて髪^(結って)ゆうてしんじよ

39. 中の中の小仏

○中の < 小ほとけ【図5】

図

此通^(並び)二ならひて、廻りの黒く書し処の子とも八、皆手をひきあひてつくはい居る、其中^(引き合いて)ニ一人立し子、たち上り

て、四方を見てまわり < 云詞有、次^(舞う)ニ記ス。次にまわりの子とも、いつれもまた立^(上り)あかりて、くる < とまわ

る時、中の子一人ハ又下につくばう也。此通何辺もする也。

中の子ノ云詞、はたの < 子仏^(背が低い)はなぜにせい^(闇魔)がひくいぞ、ゑんま^(傍ら)のかちハラで、いそ < とか^(屈んだ)づんだ、かづんだ、

ト云テ、下ヘツクバウ(蹲う)

廻りの子の云詞、中の < 子ほとけハなせにせいひくいそ(仏)、彘(背が低いぞ)んまのかち八(聞魔)らで、いそ < とかゞんだ < (傍ら)、ト云テ、イツレモ下ニ座ツク

40. 親はとるとも

○親はとるとも【図6】

此通に先ニひとり立たるを親(定め)とさため、其帯に取付たるを子と定めて、段々に帯ニ取付居る也。さて、向の方へ一人たちし子、此子をとらへんとする也。是をおやにさだめし子、とらへさせじとする也。

子になりしめん < (面)、おやのかげニかくれ申也。扱(除)いつれ成ともとらへ申をば、其とらへられし子(捕らえ) [] になりて、とらへし子ハ又 [] になる也

此つなきし方の子とも云詞、親はとるとも、此子は得とるまい

41. 鬼々事

○鬼々事

始にあつまりし子とも、片手でにぎり(握り争)こぶしを一処(敷え)にならべ、先其内いづれ成とも一人かぞへ手ニ成て、いづれよりなりともかぞへ出し

だごれがおにじやもの、トカソベテ、ノ、字ニアタル子ヲ鬼トサダム

扱(数えて)、庭の兩のきを家とさだめ、此方ののきより向ひののき下へはしりわたる也。それを其中ニ鬼一人立居て、追かけとらゆる也。とらゆれば、とらへられし子、又鬼とかわる也。兩方にのき下せまければ、地に筋を付て、其内を家とさたむる也。若又、一方に成とも、兩方に成とも、家の内計に居て出ざる事久しければ、鬼其所ニ行て出やらねば、耳をひくと云てまわり、耳をひく也。又ぢい、ばゞ、他人と云て、家より三またがりまたかる内は、鬼とらへても鬼ニせず、此詞なければとらゆる也。又、鬼の居る所より遠き所の子ともハ、鬼のこぬ間ニせんたくせうよと云て、着物のすそを取て、せんたくのまねする也。是ハ鬼をあなとりたる詞也。又はしり出る内、鬼に出あひておいもとされて、始の家にはいれば鬼ニする也。

又、鬼々事にまじらぬものハ、つちか、こほしか

42. 狼事

○狼事ヲハカミ 是は一人をとらへて皆々つれ行てつきはなし、皆々にぐるを追かけ、いづれにても一人とらへ、これをつれ行て如此する也

43. 草履かくし

○草履かくし 是はあつまり居る子とも(草履)のぞうり、かた < づ、取集て、そらへなげ上、(片)てるかふるかといへば、草履地に落て常の如く成をてると云、うつぶけになるをふると云て、其 [] の方のぞうりぬしハ、(空)ねて居ると云ていつかたへ成ともあつまり居て、[] の方のぞうりぬしの子どもばかり、このなげしかた < の草履を、(投げ)其近辺いつかたへ成ともかくし置也。扱(照る)、片足上て飛々ありき (是をあしりこぎといふ)、足のつめたいに、草履買てたもれ < と云てまわる也。扱(降る)、ねて居たる子とも方々と尋ありき、尋あたりたる人は次の番にハ、又かくし手の方の人数に入る也。尋出されしぞうりぬしは、又、ねる方ニ入て、次の番尋ねて加る也。何人ニても此通り也

44. かくれ子

○かくれ子 是ハあつまり居る内の子共の内を [] 扱(ママ)、此人かくれ居るを尋出し、又尋出したる人かくれ番ニ成也。又二、三人もかくれ番ニあたりて (是ハ兩人も三人も一処ニたくる出故)、かくれ居る時、一人ハ尋出さる時、其一人残りのいまた尋出されぬ子ともニ云、きうせんとして、ようかくれ小鼠、猫か橋を渡るぞ < (隠れ)、と云て、尋人と一処ニ付あるく也

45. いちくたちく

○いちくたちく へいちく。たちく。たいねんぼうに。たんたけ。おちやうが。恋しき。小山の。またすも。やうずも。かんねの。よんぼし。でんでう。で。十度に。一度は。のいて。やすみやる。まいかいの。どうちく。びんぼう。はなげに。どんぼう。つない。だ。

是は左の手をにぎりて、めい(銘)く(一)に一処(しうど)にさし出し、[](空白)ちよ(読み)み出し、くるく とまわす。句切くハ〇を記、又たいねんぼうを鯛の目とも、又でんでうでにじつとひけ此通二も云

46. くいにすいに

○くいにすいに へぐいにすいに、くそかきもつて、たれ小男、やぶ(藪)の下(打ら撒いて)の、くそかきうちらまいて、うんなめた

47. 大やぶ小やぶ

○大(藪)やぶ小(藪)やぶ へ大やぶ、小やぶ、ぎろり、ちよんぼり、小川に、ごいし、びわの葉に、こんにやくまかみ又八眉 眉又八まつげ 目 鼻 口 齒 耳 舌

是は我か髪(髪)かほ(数え)に至りて、かぞへ指(押し)二てほしへ云

48. 雀の酒盛り

○雀(酒盛り)のさかもり へすゞめの酒盛、ちうく はらり

是はたがいに人の手(甲)のかう(摘み)をつまミ、又其上をほかよりつまミ、だん(段)く 此通二かさねて、上下く(重ねて)して云、ばらりと云時、皆はなしてのく(離して退く)

49. 地頭様手車

○地頭様手車【図7】

此通二、二人して手をくミ、両方へ足をまたげさせて、一人のせ行、此〇付のあいだに、乗人の足さぐる也。乗人は二人の肩二手をかけて、足を此所二入、乗りありく也(歩行)ありいく云詞、これはたれが手車、地頭殿手車、此通りくり返しく云

50. かあごかあご

○かあごく【図8】

此通二人のかたへ手を打かけて行(歩行)ありいく云詞

かあごく、友達く

註

- 1) 林羅山「徒然草野槌」(元和7年刊)。
- 2) 齊東野人「武林隠見録」(享保3年自序)。
- 3) 1645年。
- 4) 大猷院殿。江戸幕府3代將軍徳川家光。
- 5) 堀田正盛。江戸幕府老中。
- 6) 鎌倉幕府初代將軍源頼朝。
- 7) 北条政子。源頼朝妻。
- 8) 梶原景時。
- 9) 「天が紅」。夕焼け空のこと。
- 10) 「へさえる」。押さえつかまえるの意。因幡地方の方言。森下喜一編『鳥取方言辞典』(富士書店、1999年)。
- 11) 麻の皮をはいだあとの茎。盂蘭盆の迎え火・送り火に使う。
- 12) 蛇の異名。

- 13) 亀。鳥取県の方言。森下編『鳥取方言辞典』（前掲註10）。
- 14) 木履。
- 15) 牡丹雪。鳥取の方言。森下前掲書。
- 16) 吉田兼好「徒然草」第181段。
- 17) 浄土真宗の信徒。
- 18) ダンゴムシ。なお、クソ虫とは動物の糞に集まるコガネムシのこと。
- 19) ゴミ。
- 20) 奥様。
- 21) 痒みのあるできもの。

【史料翻刻編 付図】

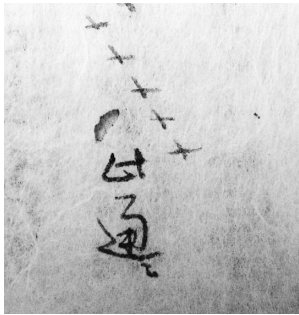


図1-1
8. 棹になれ



図1-2
8. 棹になれ

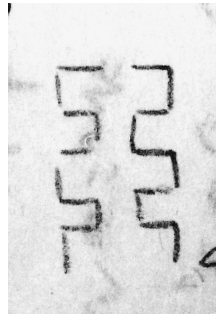


図2-1
31. ありの道はどう行こう

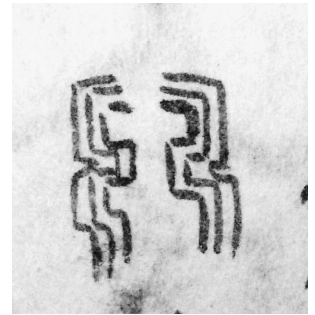


図2-2
31. ありの道はどう行こう



図3
37. いれいれごんぼ

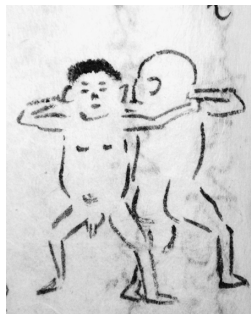


図4
38. いれいれごんぼ（二人）

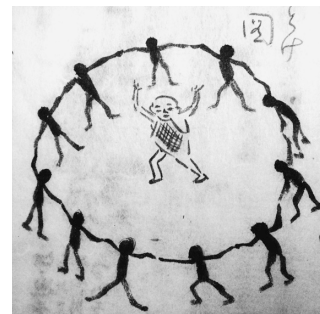


図5
39. 中の中の小仏



図6
40. 親はとるとも



図7
49. 地頭様手車



図8
50. かあごかあご